

## 空手道詳説（39）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

##### （1）沖縄の言語

ケ 沖縄新方言（ウチナーヤマトグチ）

##### 1) 沖縄新方言の発生

1879年（明治12年）の沖縄県設置後は、県令（県知事）を始め主要役人の殆どが本土から派遣された。その時、施政体制上の問題となったのは言語の違いであった。

琉球方言は、元々が現代の日本語につながる「日本祖語」から枝分かれし、本土の言葉と異なる変化（11～12世紀頃から方言化への傾斜が強まる）を遂げたことは、『カ 琉球に住んだ人々と日本語からの分離時期』のところで詳しく述べた。

沖縄県の人びとが生活語として方言を使うのは仕方ないとしても、学校などで日本語を使用させる運動は、1900年頃から顕著になったのは前項で述べたとおりである。

中央政府（明治新政府）によって、琉球王国が一方的に解体され日本の一部分に組み入れられた「琉球処分」の後、沖縄諸島では日本語の影響を強く受けながら経過し、琉球語と日本語との言語接触が起こりつつ太平洋戦争開戦前に至る。

これらの経緯の中では、学校における琉球方言の排除と共通語（以下、「標準語」と記す。）使用の徹底策を何度も講じるが、必ずしも功を奏したとは言い難いのが実態であった。理由は明白で、長年使われてきた琉球国の言葉（方言）は、沖縄県人には母国語として捨てることのできない第一級の文化であるという意識であった。

しかし、それまでの間も、兵役や国外移民、本土への出稼ぎや移住等々、標準語を話せないと不便をきたす差し迫った事態は数多存在していたのも事実である。

様々な場を通して、次第に旧来の方言話者は高齢者に限られ、その土地の言葉が分からない、もしくは聞いても話せない若者が増えるという現象も広がりつつあった。

それらの状況とも関連し、普及した標準語は元の方言の影響を強く受け（言語接触）、太平洋戦争後の沖縄県における米国統治の時代（1945年から1972年まで）は、本土との交流が断たれたことも大きく影響し、1980年後半以降から標準語に対する明瞭な独自性が見られる新たな現象として発生したのが、沖縄の新方言というより新たな日本語方言ともいべき言葉、ウチナーヤマトグチ（沖縄の大和言葉）という言語であった。

勿論、戦後急激に増加した標準語を使ったメディアの普及は、標準語が理解できないと日常生活に不便をきたすという、それまでと違った情勢の変化も見逃せない原因の一つと言えよう。

ウチナーグチ（琉球方言）とヤマトグチ（日本標準語）、それに占領下ばかりでなく未だ基地を抱えたまま米国人の話す英語が混ざり合い、更に若者たちが生み出す新語も加わって出来たのがこの新方言である。ここでいう「～グチ」は口のこと、沖縄県に限らず国内でも口を使って述べる全てのことを意味する。

ウチナーヤマトグチの文法は標準語と同じで、元々の方言と違い本土の人が聞いても概ね理解は可能かもしれない。ただし、その構成は、琉球方言のうち主に那覇方言の語彙やアクセントから強く影響を受けている。

それに、母体であり最も影響力が大きいとされる琉球方言と、ウチナーヤマトグチの境界線がはっきりしないところもあるし、琉球方言本来の意味と異なる独自解釈や誤読がそのまま定着しているなど、ウチナーヤマトグチには幾つか留意すべき点が存在する。

現在では、旧来の琉球方言を話し理解できる人は殆どいなくなり、特に沖縄の本土復帰（1972年）以降の世代は、ウチナーヤマトグチを母国語のように使う人々が多くなった。もっと若い世代では、標準語とウチナーヤマトグチが混ざった会話をする人たちが増えてきている。

タレントなどが出身地の方言や特産物など、面白おかしく紹介するテレビ番組がある。その番組で沖縄県出身者が話すお国言葉が、ウチナーヤマトグチである。

内間直仁・野原三義編著「沖縄語辞典」の序文に、次の記載がある。この辞典は2006年の初版だから10年前であり、記載の年齢に10歳加えなければならない。

沖縄本島では、現在30代以下の世代は70代以上の世代と方言でのコミュニケーションは不可能である。70代以上が使っている元の方言は急速に失われつつある。その方言の消滅を憂いて、沖縄県議会は2006年3月29日、沖縄固有の方言の継

承と普及を図る目的で「しまくとうば（島言葉）の日」を制定する条例を可決し、9月18日とその日と定めた。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行
- ・ 金城昭男著「空手伝真録」、初版平成11年7月10日、沖縄図書センター発行
- ・ 埴原和郎著「日本人の骨とルーツ」、初版平成9年9月30日、角川書店発行
- ・ 内間直仁・野原三義編著「沖縄語辞典」、初版2006年5月、株式会社 研究社発行